



いしい ゆめみ / 1999年秋田市生まれ。在学時は硬式庭球部所属。東京大学教養学部地理・空間コースにて「人口減少地域のスマートシティ政策」を研究。卒業後、ソフトバンク株式会社に入社し、日本最大級のスタートアップ支援施設STATION Aiの運営に従事。社内プレゼンをきっかけにデジタルトランスフォーメーション本部次世代インフラ事業部に所属、過疎地域の水/電気/電波を自律分散化する事業に取り組む。

生活インフラを誰にでも、いつまでも

石井 ゆめみ (平成30卒)

私の志は、「人口が減少しても持続可能な仕組みをつくる」こと。

秋田県で生まれ育ち、幼い頃から人口減少への危機感が刷り込まれた。だからこそ、小学校で「人口爆発」について習った時、衝撃を受けた。世界では人が増えすぎて資源問題が発生する——。ならばどうして秋田の人口減少はこれほど問題視されているのか、人口が変化しても困らない仕組みさえあれば皆が幸せなのではないか。当時抱いた問いに対する答えを見つけないという気持ちだが、今も原動力になっている。

既存の大規模なインフラは、減少する税収ではまかなえない。独立して機能する小規模分散インフラであれば、過疎環境においても1世帯当たりのコストが一定のため生活水準を保つことができる。水道管の要らない水循環装置や、電力の自給自足、地上に基地局がなくても利用できる衛星通信など、私が取り組んでいる次世代インフラは今後重要な一手になるだろう。私はこの可能性に魅せられ、モンゴルのゲルやシリコンバレーのオフグリッド施設を訪れて探究を深めてきた。国内そして世界中の人々にこの分散インフラを届けることを目指して各地を駆け回っている。

そんな中、7月に秋田県を豪雨が襲った。水道設備が冠水した地域があると知り、離れた故郷で起こるインフラ危機にいたたまれない気持ちになった。被害を社内に伝えた次の日には機材を積んだ車で秋田に向かった。地元の方々の協力で五城目町に設置した水循環シャワーは5日間で延べ320名の住民の方々にご利用いただけた。5日ぶりに浴びて人生最上のシャワーだったと目を潤ませる方もいて、私も胸が熱くなった。この場面のために自分はやってきたんだと、心から思った。何十年経っても忘れたくない初心があるとすれば、住民の方がシャワーテントから出てきた瞬間の笑顔を見た時のあの気持ちだ。

豪雨後の五城目町で私は、これから頑張る理由をもらった。人口減少がどんなに進んでも、そこに住む方々が変わらない暮らしを続けられるように、まずは故郷秋田の持続可能なインフラに貢献していきたい。

一燈照隅 万燈照国

辻 卓也 (昭和62卒)

大学を卒業し、世界との貿易に関わりたくと商社に勤め、飼料穀物・食肉の輸入を担当。ラグビー部で培ったバイタリティーが大いに生かされました。

しかし、家族を持って中堅社員になるにつれ、これまでの生きざまを振り返りながら自らの天命・天職を考えることが増え始め、地域独自の菓子文化を絶やさぬため秋田の土になることを決意。40歳で帰郷して家業の和菓子屋5代目を継ぎました。

妻と子供たちもよくぞついて来てくれたと感謝しています。

それから15年、家業の経営と郷土菓子の啓蒙に努めつつ、地域で商いをするもの定めとして、本業以外に商店街や商工会議所、地域ボランティア活動などさまざまな役割を担っています。

当然、日本一の花火のまち大曲においては、全国花火競技大会（大曲の花火）の運営に関わることも自然の流れでした。

私の父・久男（昭和34卒）は、家業はもとより地域貢献として花火大会運営に関わり、旧西ドイツや台湾までPRと国際親善のために花火を打ち上げに行くほどでした。

そんな背中を見て育った私も、やはり似た道を歩んでいます。

集客に苦心していた父の時代から一変し、全国的な知名度の巨大イベントに進化した現在では役割も変化しています。4年前から地域の学校と協働し、小中高校生の会場案内ボランティア「大曲で最高の花火を見せ隊」を組織。地域への矜持を持って大会運営を担える次世代の育成を始めました。また、地元で130年の歴史を持つ雄物川の「サケの孵化放流事業」安定化に寄与すべく、花火通り商店街を流れる丸子川でのサケの捕獲も始めています。

55歳になり人生の3分の2以上が過ぎました。これまで以上に己を修めて、大曲の一燈として世界の片隅を照らし続けることで「世のためつくす」の思いを強くしています。

秋高の教えは意識せずともこの身に深く染み込み、知らず知らず我が人生の決断においての道標となり、矜持となっていました。今は本当に感謝しています。

余談ながらこの原稿を書きつつ、私たちが学生だった昭和60年頃、学生食堂に毎日髪を奇麗にセットした塚家昌子に似たお母さんがいて、たまにウインクしてカレー大盛りにかき揚げをサービスで乗せてくれたうれしさを思い出しました。



つじ・たくや / 昭和43年、大仙市大曲生まれ。秋高時代はラグビー部所属。筑波大学生物学類卒。総合商社勤務後、帰郷し家業である老舗和菓子店「つじや」5代目を継承。伝統的な郷土菓子「豆腐かまぼこ」「三杯もち」を守り続けながら、さまざまな地域活動に携わっている。